



日英語ならびに西欧諸語における時制の比較研究

著者	和田 尚明
発行年	2011
その他のタイトル	A Comparative Study of Tenses in Japanese, English and Other West-European Languages
URL	http://hdl.handle.net/2241/115040

科学研究費補助金研究成果報告書

平成23年 5月16日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520414

研究課題名（和文） 日英語ならびに西欧諸語における時制の比較研究

研究課題名（英文） A Comparative Study of Tenses in Japanese, English and Other West-European Languages

研究代表者

和田 尚明（WADA NAOAKI）

筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・准教授

研究者番号：40282264

研究成果の概要（和文）：本研究では、言語系統的に全く異なる言語である日本語と、英語をはじめとする主な西欧諸語の時制現象における相違点・類似点を指摘・考察した。特に、(1)これらの言語の時制現象を統一的に扱える時制理論として、時制関連領域に属する助動詞・アスペクト・モダリティ・証拠性ならびに話者の主観性が反映したモデルを確立し、(2)主観的要因によって大きな影響を受けるいくつかの言語環境において、これらの言語の時制現象がどの点で共通し、どの点で異なるかを示した。

研究成果の概要（英文）： This study pointed out and investigated differences and similarities in tense phenomena between Japanese and some major West-European languages including English. In particular, (1) by taking constructively factors related with tense such as auxiliaries, aspect, modality and evidentiality as well as the speaker's subjectivity, we developed a tense theory which provides a basis for a unified account of tense phenomena of these languages, and (2) we showed how tense phenomena of these languages behave differently and similarly in several linguistic environments affected strongly by subjective factors.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総 計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：時制、比較研究、証拠性、モダリティ

1. 研究開始当初の背景

従来から日英語の時制現象の比較研究は盛んに行われており、分析手法の観点から、主に以下の6つのタイプに分類できる。

- (1) Reichenbach 流の3つの時点を用いた時制構造に基づく分析
- (2) 認知文法に基づく分析
- (3) メンタルスペース理論や関連性理論な

どの枠組みに基づいた時制解釈に焦点をおく分析

(4)生成文法の枠組みによる分析

(5)形式意味論の枠組みによる分析

(6)独自の枠組みに基づく分析

しかしながら、これらの既存の枠組みにはそれぞれ問題点・不十分な点が見られた。(1)は複雑かつ詳細な時制現象の分析には単純すぎるし、(2)(3)は形式的な側面をあまり重視しない傾向にあるため、言語間の時制形式の相違が時制現象の相違へとつながる面を説明しきれていなかった。反対に、(4)は原理の追及や形式的側面を重視しすぎるあまり、適切な時制解釈のメカニズムを示していない一方、(5)は正確な定式化を重要視するあまり、原理的な説明ができていなかった。(6)については、記述的な域を出ていなかった。

これらの問題点・不十分な点を克服するためには、形式的相違と時制解釈メカニズムの両方に配慮した上で、より原理的な説明を行うための時制モデルとして、時制関連分野である助動詞・アスペクト・モダリティ・証拠性などの要因ならびに話者の主観性に関する側面を取り込んだ、包括的かつ体系的な時制理論に基づく分析を行うことが必要である。したがって、本研究はこのような時制モデルに基づいて、日英語ならびにドイツ語・オランダ語・フランス語・スペイン語の時制現象を比較考察することを目指すこととなった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語と英語をはじめとする主要西欧言語の時制現象の相違点と類似点を観察し、各言語の時制形式の相違やそれが生起する言語環境などの要因が時制解釈に与える影響を明らかにすることで、各言語における時制解釈のメカニズムを解明することにある。具体的には、以下の2点に焦点を当てて研究を進める。

(1)言語系統的に全く異なる日本語と英語をはじめとする西欧言語の時制現象の比較研究を包括的に行える枠組みを確立させる。

(2)(1)の枠組みを基に、日英語とドイツ語・オランダ語・フランス語・スペイン語の特定言語環境における時制現象の比較研究を行う。

3. 研究の方法

研究の目的で述べた2点を押し進める上で、以下の4つの単位を中心に進めることとする。

(1)モダリティ体系や助動詞、アスペクトや主観性などを取り込んだ日英語比較のための時制理論の確立(担当:和田尚明)

(2)日本語とフランス語・スペイン語をはじめとするロマンス諸語の比較を行うモダリ

ティ理論の提案(担当:渡邊淳也)

(3)特定言語環境における日英語とドイツ語・オランダ語の時制解釈のメカニズムの解明(担当:和田尚明)

(4)特定言語環境における日英語とフランス語・スペイン語の時制解釈におけるメカニズムの解明(担当:渡邊淳也・和田尚明)

これらの単位で得られた知見を共有するために定期的に研究会やワークショップを開催したり、知見をより深めるために学外から専門家を招聘して講演会を開いたりする。

4. 研究成果

(1)まず、日英語の時制現象の対照研究に必要な観点として、時制形態素のタイプの違いが時制構造の違いに反映している。具体的には、定形動詞の場合、英語は人称・数・法と一体化した時制形態素(A-形態素)を持つのにに対し、日本語は人称・数・法と一体化しない時制形態素(R-形態素)を持ち、前者は「時間区域」という文法的時間帯を時制構造内に含むのにに対し、後者はそれを含まないとする。ことで、日英語の時制現象の根本的な相違点を捉えることができる(例:語り体独立節、間接話法補部、時間節、条件節における時制現象)。その一方で、日英語の定形動詞は、このように時制構造は異なるが、時制解釈を受ける際、それが生起する言語環境の特徴の影響を受けることで、見た目の類似性を引き起こすことがある(例:会話体独立節における時制現象)。

(2)A-形態素は文法的時間を測る中心点である「話者の時制視点」を含む時制構造を表すため、「話者の意識」が存在する発話時におかれるのがデフォルトとなるが、当該時制形式の出来事が当てはまる時点(出来事時)の位置を測るための基準時は、それが生起する言語環境の特徴によって位置が定まる「話者の状況視点」がおかれる時点である。英語の定形動詞では、この2つの視点が一致する場合とずれる場合があるが、どちらの場合も違いは形に反映しない。一方、日本語の定形動詞はA-形態素を持たないため、その時制構造には時制視点が内包されず、その結果、状況視点のおかれる時点を中心とした時制形式選択となる。したがって、日本語では、原則として言語環境ごとに時制形式選択の基準点が異なることになり、デフォルトが発話時となる英語の時制形式選択パターンとは異なる場合が多くなる。また、A-形態素を持つ英語の定形動詞は言語環境の特徴による(解釈の)強制を受けにくいのにに対し、A-形態素を持たない日本語の定形動詞は受けやすくなる(例:知覚動詞補部の定形動詞、独立節における「タ」形)。

(3)次に、時制関連要素が本時制理論においてどのように関わってくるかについてであ

る。助動詞は、定形・非定形という観点やプロトタイプ理論を取り入れることで、語彙動詞と同じく1つの独立した動詞として時制構造構築に寄与する。モダリティや証拠性は、話者の主観性と関連して、発話時における話者の心的態度・心的状態を表し、時制解釈に影響を与える。アスペクトは、主に、完了・未完了の違いが時制解釈に影響を与える。これらの要因が有機的に関連することで時制解釈に多大な影響を与えることが、いくつかの言語現象を通して明らかになった。具体的には、フランス語の半過去の多様な用法、日英独蘭語の間接話法補部ならびに英蘭語の過去形の解釈にはモダリティとアスペクトが、フランス語と日本語の近似表現（留保マーカ）にはモダリティ・証拠性が、フランス語のジェロンディフ・現在分詞構文、日英語の知覚動詞補部ならびにロマンス語の未来表現（単純未来と迂言的未来）にはアスペクトが、英語の *will*-文、*be going to*-文、現在進行形文、未来進行形文ならびに他のゲルマン諸語の未来表現にはモダリティ・アスペクト・助動詞が、時制解釈に多大な影響を与えることが体系的に示された。

(4) また、主観性に関わる別の要因として、話者意識への引き寄せ（C-牽引）という概念が必要であることも明らかになった。C-牽引には形式に関するものと意味範囲に関するものがあり、発話時に存在する話者の意識が活性化することで、発話時を中心に据えた時制形式が選択される現象や、意味範囲が発話時を含む現在時に引き寄せられる現象と定義される。この概念を導入することで、英語・ドイツ語・オランダ語・フランス語・スペイン語の未来表現や英語とオランダ語の完了形における時制現象の相違点を体系的に説明できる可能性が高いことを示した。

(5) 日英語ならびにドイツ語・オランダ語・フランス語・スペイン語の時制現象を説明するのに、時制関連分野を包括的に取り入れた形での時制解釈モデルが提示されたことは、これまでほとんどない。本研究では、この時制モデルを確立し、それに基づいて、A-形態素を持つ西欧言語と持たない日本語の定形動詞の時制構造の違いが、両タイプの言語の時制形式選択の相違の根底にあること、その根本的な相違点に特定言語環境の特徴の影響が加わることで（解釈強制が可能かも含めて）時制解釈のパターンが決まること、さらに時制構造が同じ西欧言語間では C-牽引が異なる時制現象を引き起こしている一因であることを明らかにできたので、時制現象の比較研究において有意義な成果を得たと思われる。

(6) また、研究成果の一部を編著書（*Distinctions in English Grammar* 2010 年、『「内」と「外」の言語学』2009 年）と

いう形で出版することで、社会に還元できたことも有意義であった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）

① Wada, Naoaki, “On the Mechanism of Temporal Interpretation of *Will*-Sentences,” *Tsukuba English Studies* 29, 37-61, 2011. 査読有

② 和田尚明 「現在完了形の表す意味範囲の変遷と C-牽引：英蘭語比較研究」『文藝言語研究：言語篇』58, 75-112, 2010. 査読有

③ Wada, Naoaki “On the Distinction of English Past Tenses,” *Distinctions in English Grammar, Offered to Renaat Declerck*, 42-71, 2010. 査読有

④ 渡邊淳也 「フランス語および日本語における留保マーカについて」『文藝言語研究：言語篇』58, 55-74, 2010. 査読有

⑤ 和田尚明 「「内」の視点・「外」の視点と時制現象」『「内」と「外」の言語学』249-295, 2009. 査読有

⑥ Wada, Naoaki “The Present Progressive with Future Time Reference vs. *Be Going To*: Is Doc Brown Going Back to the Future Because He Is Going to Reconstruct It?” *English Linguistics* 26, 96-131, 2009. 査読有

⑦ 渡邊淳也 「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の総合化・文法化について」『文藝言語研究：言語篇』55, 123-144, 2009. 査読有

⑧ 和田尚明 「公的自己中心性の度合いと西欧諸語の法・時制現象の相違」『言葉のダイナミズム』277-294, 2008. 査読有

⑨ 渡邊淳也 「分岐的時間の表象を用いた時制・モダリティの連関の説明の試み」『文藝言語研究：言語篇』54, 15-44, 2008. 査読有

⑩ 和田尚明 「「内」の視点と時制現象：日英語対照研究」『文藝言語研究：言語篇』52, 93-149, 2007. 査読無

⑪ 渡邊淳也 「間一髪半過去(imparfait d'imminence contrecarée)をめぐる」『文藝言語研究：言語篇』52, 151-175, 2007. 査読無

⑫ 渡邊淳也 「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法」『フランス語学研究』41, 54-59, 2007. 査読有

〔学会発表〕（計 11 件）

① 和田尚明 「*Will*-文の時間解釈のメカニズム」山口大学英語学研究会、2011.1.21、山口大学

② 和田尚明 「日英語時制現象の対照言語学

的分析」日本フランス語学会談話会、2010.11.13、京都大学

③ Watanabe, Junya “Toujours et yahari, adverbs reconfirmatifs de la stéréotypie” La stéréotypie: Journées scientifiques tuniso-japonaises, 2010.9.22、マハディア・パレス（チュニジア共和国）

④ 渡邊淳也 「フランス語の語彙意味論とメタファー・メトニミー」日本フランス語学会、2010.5.29、早稲田大学

⑤ Watanabe, Junya “L’approximatif en français et en japonais” 第1回筑波大学・フランシュ=コンテ大学合同セミナー、2009.10.28、フランシュ=コンテ大学（フランス共和国）

⑥ 渡邊淳也 「時制からモダリティへ：分岐的時間による反実仮想文の説明」第3回北京大学・清華大学・筑波大学合同セミナー、2009.9.20、北京大学（中華人民共和国）

⑦ 和田尚明 “On Declerck’s Distinction between Absolute and Relative Past Tenses: Homophonous or Polysemous?” 山口大学英語学研究会、2009.9.17、山口大学

⑧ 和田尚明 “A Contrastive Study of Differences in Choosing and Interpreting Japanese and English Tense Forms” 山口大学英語学研究会、2009.1.21、山口大学

⑨ 渡邊淳也 「分岐的時間の表象を用いた時制・モダリティの連関の説明の試み」日本フランス語学会第250回例会、2008.9.27、慶応義塾大学

⑩ 渡邊淳也 「間一髪の半過去をめぐって」日本フランス語学会談話会、2007.7.14、東京大学

〔図書〕（計3件）

① Bert Cappelle and Naoaki Wada (eds.), *Distinctions in English Grammar: Offered to Renaat Declerck*, Kaitakusha, 2010, 361pp.

② 髭郁彦・川島浩一郎・渡邊淳也 『フランス語学概論』駿河台出版社、2010、240頁

③ 坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明（編）『「内」と「外」の言語学』開拓社、2009、430頁

〔その他〕

<特定の言語環境における日英語ならびにドイツ語・オランダ語・フランス語・スペイン語の時制形式対応資料集>を作成。筑波大学人文社会科学研究所、2011年5月。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

和田 尚明 (WADA NAOAKI)

筑波大学・大学院人文社会科学研究所・准教授

研究者番号：40282264

(2) 研究分担者

渡邊 淳也 (WATANABE JUNYA)

筑波大学・大学院人文社会科学研究所・准教授

研究者番号：20349210